和装本
ケ 5
44
96

宮内省図書寮

馬醫秘書巻之一目録

一 結馬見様の事
二 尿結之次第之事
三 虫腹次第之事
四 内羅次第事
五 寒熱見分因菓事
六 セカ(リ)之事
七 腎虚之事
八 息の粉の事
九 風之病之事
十 瀉結馬之事
十一 虫菓之事
十二 シノハレノ事
十三 血留菓之事
十四 勝瓦りの事

十五 鼻血留薬之事
十六 風邪ヲ荒く打ツる事
十七 骨續之事
十八 打身之事
十九 大風の薬之事
二十 サヤニ出ル瘡薬の事
廿一 寸白虫之内入ル事
廿二 腹中ニテ上下ナヤマス事
廿三 キシ下寸白薬之事
廿四 カウガイ薬之事
廿五 五臓六味之事
廿六 キシ腫ル薬之事
廿七 病ヲナヲリル時心持
廿八 の事
廿九 ユルキ病薬之事
卅 馬ヲフスル方之事
卅一 カタメ之事

同二目録

一 腑臓次第之事
二 内腑の事
三 ちや腑の事
四 ちつたんの事
五 ひきはの事
六 主有馬の事
七 逆ふる事
八 舌くびの事
九 咽喉之内腫塞る
十 [illegible]

この事

十一 鳥合の薬の事

十二 小黒焼の事

十三 五臓六腑の事

十四 開の出たる事

十五 走獣の事

十六 狼の食したる事

十七 犬に噛れたる事

十八 寸白さんの事

十九 汁口ひるの事

二十 癖ありたるをへ

二十一 馬骨積の事

二十二 百の書解たる事

二十三 ものの事

二十四 鳴たる事

二十五 犬そく湯の腫物

二十六 鳥切の事

二十七 乗たる時腹痛る事

二十八 蜂蜂より出の事

二十九 牛小つたる事

三十 猪にけ殺たる事

三十一 子負馬血下の事

三十二 矢の根ぬきの事

三十三 馬にもげ立る事

三十四 熊の毒なる事

同三目録

一 結馬之事
二 ちり紙の事
三 男紙之事
四 鋏の事
五 ないしの事
六 ゆし菓の事
七 稜菓の事
八 肩ぬぎするの事
九 湯殿裏之之事
十 月代の事
十一 ゑゑ物のこと
十二 梅菓之事
十三 菓仙毛之事
十四 ゆめ菓之事

十五 四足門内の事
十六 かくれの事
十七 ひもの事
十八 ひとりの事
十九 ちりとりのこと
二十 うゑ虫之事
二十一 屋ゑのこと
二十二 あくとれのこと
二十三 古ゑ道物喰の事
二十四 ちもり事
二十五 うゑのこと
二十六 うゑやくたち
二十七 ちゑのこと
二十八 たゑを打血の間の
二十九 内にゑのこと

貳 尾の口たゝき又ハ穴入ゝ事
貳一 さんらけさるゝ事 又友引娘
貳二 臭合ゝ事
貳三 秘蜜指薬ゝ事
貳四 つゝいの事

一 結馬と云ハ股ぬきれて左右へ通ス也なり馬
嚢二ツ三ツ宛出し一ツ上小白き衣を掛ケて
出ス也ものゝ度ゝ出ス也ゝ四ツ五ツ出ス也ハた
ずゝ二ツ出ス也 結馬好ゝ云ハ度ゝ
通ゝ物也 号則能心ゝ第ハ下巻にのり但
ゝ結ゝと云ハ大熱ゝ
二 尿結と云ハ出ずゝをゝめ尾元ゝ成ゝ
尾を縛ゝ尿結搖ゝ云ハゝ嚢

熱の出ること事なり口傳は尾骨
をくぼのぢりを出さん拙して志きりに痛ハ
ぢりつまりたるゆゑ是ちりを服藥して和菓を飼
ふ角し新ら脱をしむハ下部の出るを
ぢりつまりたるを知ら角し和菓を用
角し下巻に出た

三 出脱と云ハ尾をさして後嗚咽脱を
ゆぢり物んをバ出しちりに炙を

云也又後物ゑれなるハ結石なり出後ゑ
ハ石出脱ハ後も物ゑ迫ちて炙を
ゆ石ゑ是ハ下巻に有亦出後と云ハ
云やすきなりた但こ事の内大熱後
出後と思ひ云角し鼻ちり黄
なゆゑ出ゑ事の後必死なり

四 因ら所事稀ち菓飼角ち云共飼汁
角さハ胴黄ちち事遅口傳少云

内経初八九元名分[illegible]後八次第にこれ[illegible]
[illegible]熱氣[illegible]もの[illegible]山熱寒八寒の熱
にこれ[illegible]只元名[illegible]ものの[illegible]後に
熱加減に云始め寒に見[illegible]時八[illegible]
輕く[illegible]事[illegible]大に[illegible]事も有
葉百卷に[illegible]赤[illegible]血を出
八九の灸[illegible]八[illegible]
[illegible]而[illegible]もの口傳[illegible]

鼻ツサカリ息クシ
ゲナラハ爰ハタイ
ミヤクナリ血ヲ出

寒熱[illegible]内葉[illegible]病[illegible]ハ
目ハ[illegible]鼻[illegible]耳[illegible]舌[illegible]
口元[illegible]
[illegible]見[illegible]又熱を病[illegible]ハ
目赤く鼻[illegible]耳[illegible]鼻[illegible]
ひらく舌乾[illegible]
毛身に付也[illegible]熱[illegible]七[illegible]
只一[illegible]

見分角〻息をやきい鶏や息か
ちゝ〻い寒り寒り病に用ひる薬
干姜二分 陳皮一両 人参二分 茯苓一両
香附子二分 右細末にして酒を飲ん
ひ熱り病に用ひる薬 活樓根一両
白芍藥一両 葛一両 桔梗一両 右細末
せんきの水にて一服に一盞入れ飲ん
ぶ〻五服馬にてもて七服も飲ん服者

八 セカヅリト云ハ左右ノ風ノ病也暫く
飲ん〻大事ノ病也 藥ハ
黄柏一両生細末 同一両香色 同一両黑焼 干姜二分 活樓
根同 右細末ニシ生姜をせんして飲ん
〻生姜なくハ好酒小水半分ゝ合
セ汁椀一つ入れ右ノ藥一服小一盞ヅ
入飲ん〻物也

七 腎虚と云ハ毛先にいろこ出ル也 腹尾

ゑた左右をうつすに腎の自由ふ叶
ものゝ　白朮五匁　干蛤同　干トコロ三匁
右粉にして蕺菜（ドクダミ）をせんじたて酒にてのむ
一日小三匁入一度に五日目ゝに二度ゝ
七日可飼療治八百會七穴ヲ灸スベシ
又干蛤蔓根大黄等ハ茅分に合セ
て又カニ入テ五十包ニ百包ニ飼角一
但シ日ニ二三度ヲ妙なり

八息の病ゝ云ハ常小鳥年ゝ糸ハ
弱ク年ゝ荒ゝ糠草ハ喰しうとも
水を飼ハ二日三日呑テ口ウラ引ケバ
亦喰いゝもツケテ五日ゝも喰ぬも
のゝ又豪て息絶メル馬ハ常には息
静ニして豪時沖息荒ゝ鼻音
ゝ或ハ鼻の穴ハ鼻孔ハ清子ハ
ハまかなゝ昌蒲方左小記也

和方ノ薬アヲモト用ユ

赤ミソ霜一両 苅芦一鍋酒 干姜三分 桔
梗一両 右細末ニ煎汁ハ内庭を堀りて水
を入濁して澄ませ一日に右之薬一
盞入一度に五日ニ二度宜日間也
京て臭メヲル馬に此薬を飼て亦
別ニ魚合薬を飼魚一陽の魚ハ病
にハ時を而もて亦ちけく水を口を可
洗細ニ山の芋をシロシテ せるかの
乎ハ出てきりのべて可飼又ハ治ス陽先
を忘ナリ

九 風病の事 風ニ云ハ様ニ多ケレ
ト皆薬ハ少て治を俄ハふるうかり
始ハい様ニ名数多くなる也 白朮一両
桂心三分 人蔘一分 細参一両 耳サ
右細末蔵薬を丸りたて酒ニ右之
薬を可飼風病に名数多くなる水

細参恐細辛

白藥　四品アリ　一梧桐ヶ　一大麥ヶ　一瓜蔕ヶ
一天門冬ヶ

燈籠草　一酸漿ヶ　一ナウツキヶ　又
一名ウキクサヶ

白物　一名ケイフレ　又稜米粉　又ハ參
又唐ヶ右和ノ秘名ヶ云

俄に始まる八時の薬を飼ふ〜陰
く始まる〜川へ入る時も早く水
とけ元来して治すること是八息答
なる時の事なり息答薬を飼ふ
則治スむ妙也

十 浮張ちと云ふ物に薫ず
元来して是八布を物を濡し
たる〜ものハ出て加ハ留らるべし

薬八綿砂大黄甘草各一両牽牛
子苟薬各二分 右細末作こう可飼

十一 七薬事 雄黄霜 苟薬 焼塩
庫角霜 半夏黒焼 右右等分
能合せ清水にて洗て使用べし
十二 志の子の葉 猪油 硫黄 松脂
活蔓根 芦毛馬の血 小うこ 是共煉
合せ〜まる〜時 赤牛の耳の中の毛

引ちらしてちらみ有る事入てハ
ふるてこうてこうてとるぬるかに家なし付
角〳〵ちりとうけうこ糧生の方い
やす角〳〵に右口傳

十三 血留藥之事 麟血 うきゆいてく
すりたる縄 粉ニメ 山椒 右何も等分
二合也 陸角〳〵

十四 勝返り云々 うちを伏り時成ハ塩梅
を越俄にたるハ化粧いと角り切り
一ちゝさけいて生信起ちもり
又ふり起て煩もめ 藥ハ白檀
紫檀 九信子 山甲子 安仁 沈香
麝香 右等分小合せてせうぶの
水にて飼角〳〵一間ゟ一度入し一度ハ五間
も馬にしてし飼角〳〵

十五 鼻血留藥之事 紫檀 粉ニメ 二分 五

安仁未詳

倍子二分　柳枝皮二分　右煎じ寺陽まて
飼食し妙効あり　当計傳也

十六　瓦將軍あらく打て炮烙あり正
時の菓ハ　芍薬二両　桔梗根一両
編砌二分　牽牛子二分　茸仙サ　右細
末にし松のみとりをせんして飼食
却て白ゆハ四月平仲をとり婦人
妊せしを搗るにより白毒

十七　常續事常常知れを迫ハ柳を
別包て生津入常を神合て柳を
別てすたあてて飼の食を納さ加減
少て正の上に広げて干姜を粉
少て飼の上の上に焙て くるみの
末の度少て上をうゝみ毒屑上
下に四足平仲あて一日に二度
三度小便をあゝ少を過うけ

角一婦せ〳〵に骨落る脚なり

六 打身久敷あたる打身毛のこ悪敷息

あく〳〵おく〳〵出る解〳〵病とり〳〵た

糞を出し尿も通し虫腹にあるを加

腹も治〳〵して頻に病もよ打身

〳〵第八土通草一両 芎藭 一両 石

見川霜十錢 酒を煎〳〵入る

けが〳〵ハ藤木（スワウノキ）をせんじて右の薬

見川クラ貝シノ汁ニタシ水巻タルモノ

玖 何角〳〵ひや疝四季共小

水洗ふ正角〳〵に但し腹満する

ハ正角の毛てすりぬく

るハ治し難し 行根の馬小に第物

〳〵飼ふ角〳〵ふ佐ふ

九 大風〳〵云ハ馬の拇角に風たるより

毛ち中玖〳〵分てくれいさるなく

取分尾髮に出る事ハ第ハ 苦樹（ニガキ）

こもうつ水黄(子)さを薬方に合せ
せんじ洗い石原胡椒さを薬方
に合せもの根(すり附角)(妙効)
三十さるやに出る瘡の子馬を始せてさめば
(糟湯)(西海子)をかミ入れ洗
方 没薬 白物(ジラヤ) 乳香 天蓋 胡本
西海子黒焼 右薬方に合せ瘡の上小元
付け無(一)何程に成(角)(掛角)一頭

西海子
赤群

而治ル也妙
九一寸白虫の角入たる小腫物のごとく腫
神(シン)てこれ小虫うごく虫の如く薬ハ
石原山椒 芥子 苦参 右薬方に合
せ酒にて付(一)付ぬ先に故(クルミ)桃の根の
皮を煎(一)て洗(一)婦人汁食をす
ゝ事なり虫ハ元やすくなる内薬
三十 芦毛馬の尾刈て又我右

合せ耳酒うさぎうたて細末
有り何郷に三日間
三十 腹中虫を上り下り留める白の菓芦
毛むくり尾きさみ 三匁 胡椒 三匁 好き酒へ
合せ煎じをすべし一日に一度入一度
に五日間の間治せり百度細末
六十三 陰囊へ下る才白の菓 菌香 五匁 胡
椒 三匁 萑 黒焼 十匁 右細末好き酒煎

蒲サレうたて一日に右の菓を一度入
二度に五日間の間
しうるに勢うるやすべし
六十四 ちうじ菓の内 茘芦 一両香色 同
一両生 同 一両黒焼 小黒焼 三両 合うちうじの耳
うるうるの間に菓に吉妙
六十五 五臓六味の事 茯苓 麻 土いちご
良姜 村立 桑白皮 右薬分三合

村立漢蘭

等病にさいなむ時は又何汁
酒なまぬる湯あるいは何せんじ
汁にもつかの中へ入しも糟に合せ
てもよし何にこの穂を見て何汁
小口傳あり

九六 陰囊腫たる事の事 川鰕 五七 ツチ

腫と裏に付たる土をこねけてよく
研まぜすりたて付へし事後鮒黄

九七 病馬おのずからなる時の物を何にもよ
なり何にても必病者に大事なり
似て結馬又は虫腹康結或こつを撫足
なりて出あるものと又ないと脇
つがいにもつかの馬小ハ栗子に
何にもなりて虫こを

痘治に[illegible]もの又あり[illegible]
[illegible]ものハ麦をいるも胡たひら
大根の葉を入いるもよくにて汁
椀もそり又ハ武つもいうけんをえて
[illegible]ハ云ゆゑ[illegible]ハ赤
一日も二日も云ゆゑ又ゆもた
らすをうきをして物食えとす
特ニ菓[illegible]

冉原漢名徐長卿白茅詳

大豆を五合いつとより一くらいやゝ
にても糠をもくきて二合三合ゝ
[illegible]有
大[illegible]病云ハ痘に碎なる大のごと
[illegible]
柏蔓根 冉原 白茅 [illegible]
石細末[illegible]
[illegible]

九九

馬を始めるに方角あり玉女の方を忘
れる事玉女と云ハ其日九ツ目に当る方を
云九ツ目と云ハたとへを其日子の日なれハ
申の方をしるべし方角馬の面も亦
如なり

三十

産婦と云ハ馬を始めて血を出す日
悪血の出ざるまゝに始めを為す馬を
玉女の方に向ハしむ南無観世音と三

大悪

十三度唱へ産婦に
元元の梵字を書て始めを為
おこす時三度唱へ

一説

馬磬 俗ニ巻こう

一 ちさ 木 根 ハ 俗ニ 姫 の 手 ひ

らび、指て撞ん 心 草木 ゝ 根 ハ ゝ ら

いり 物 ニ して の ど ハ こ ゝ 寸 雨 を 好

ゝ ゝ 磬 ゝ 示 跡 見 四 見 共 り た て 久

ゆ も る り 和 脉 見 脉 次 第 ゝ に 見

茉 ハ 茯 苓 山 甩 子 桔 梗 麦 門 冬

木 通 牽 牛 子 大 黄 各 二 両 耳 4ツ

飯汁ハ薬礫をせん　て食梳ニて
つかうきたて飯也又薬菓子時ハ湯
食一ツ宛入レ一ツにつめうすも同前也
二　内腑の薬飯煎もしくハ又ふ紙
ふくめハ湯ハ　あり　布腑ニ包
ふんのときに必汗流ス時ハ後
ニ立持ノ三味線
を指てたれハ墨のごとく成無出なし

り云やうにあるに薬のうち
菊芳　芳連　一九の京山拖子　五一両
耳竹ヶ　右細末ノ丸てせるあさの水
ニ浸くこなり薬菓子時ハ乃食梳
ニ云ふとき入一ちいにせん　ニちん同前
三　ちの腑ニ云ハ俄にたちなもたまりた
二人ニ人口を立てし魚ケ出又ハこうろ
おちのの中石の中をいるすす伏

し脈もうるおしすぎ薬効計すべきもの
なりとすれども先婦人の血脈
をて吉し脾のいき二枚目三枚目に計
を入し事鳥合をういて為よおこ
すかりこやにうるにあるに薬のみ
人参大黄茯苓杏仁柳の芽
芎藭本当帰地黄各等分
耳竹サ右効まりまして世るかぬの為

まて効〳〵前人薬八分食後まて
一ちい半入一盃うせ〳〵効果糠
も用形ちや脾数多あるあるいる
三服にて五日事五服にるるも
第効効ある治る事稀なり十二
一ヶ効るもあり脾の数是三服より血
を去てこんにて血為りるし但し
と為る事もあるに付なり

四

石つたんと云ハ久米郡ニ有る
物をすりみとの中ニ四匁平ゆ
ハ有つるとハ云ども なおうるなく
諸国ニ有りてハ骨の生地
何程の事をハ五匁ニ成ゆで
薬ニ成るハ 青木葉 塩 大麦 雪下紅 松葉
ヒヨトリシヤウコ
俵ニ成て 内薬ハ苟薬 編乃 在両

干姜 方 莉芦生方 右頭薬 酒なとうた
くとあるて うめ合 一匁一銭入レ 麦
ハ五匁 一日二度 一七日 何ハ 紙なお
りの生川 繋さ 四匁平ゆ
を あて 与 如せ 大 たくみのとく
銀生 海 治せる 月 早く川
入ハやするる 四匁平ゆハ
あるる 婦人 血

五

元来血を流し腫を治
けるに根もなく陰囊の内
もなく人参腎物のごとくなる物是
八三月より八月を出る物と大抵同意
に先血を服し其ハ治葉根三匁白茯
一両右細末にして一日に一度入一度に
七日間〇〇〇

して板平好間に押合付角矢
の根ねぢ鍋の鬚を廿一入て上を
のりまして弦を蓋し其角
七 逆(リカヘ)ようとなるを云ハ屈(シリ)を出
なるハかゝ寄らより上塗をぬ
て初込て無馬をたゝかすして
玉生度無の勝を陽(ぬる)まして面角
（一説なるおなしもの）

八 舌くひを云ハ馬の舌に二所も二所も長
くぬけ出せて舌の裏のかゝを引出して
麦藺の所にて打切り無
生して渋柿にしてきうけんにして
此角一統に生度なうちの日に
又二度も生角米を固くて
九 咽喉の内往塞を良大おもを角
車咽喉の角をさしてこの咽喉の内

に種子を蒔き付て植付
取あて濃をあしらひて
おこして菓子ハ砂糖焼塩 梅干
焼栗かこ合せ同梅干の汁を用
治ル事

十 青豆ゆでて皮を去り
〆鶴庵げ 青豆
をあしらす菓子の
河骨 松の緑

黒小豆の花者北方ニ居セ 陸ニテ 鬼
百穂に元ハ松の緑なく小豆を用
て用ル一間一葉入二反に五間用也
三月初ゆゑ川へ引込ル也

十 皇合ハ菓子 石菖蒲の根一寸の
内に節九つ程を七路たゝきひしゃて
子供の呑ム乳まて 煎り水へ入て 菊苦 一両香色
同一面 同一両 梅干し 同三両半 鶴屋 二両 丁子 一両

麝香二分　人参一両　白朮一分　犀角二分　苦
楝根ヲ　樟脳一分　小黒焼五匁　沉香一両　木
香一分　辰砂一両　うりうく一両　香附子一両
ひなうヲ　茯苓一両　枯香油二両二分　右細末
にして梅干の肉ねりまぜ押まぜ　照く
石菖ヲたくさん乳にてゆるめて蜜
八両ニテ煉ケリ

十二　何病にも丸薬何にても其時
新生薬或ハ乾ス時薬ハ何にも
八分ハ小豆ほどこうもりと加減して何
病ニ又腹ヲ時ハ出ヲ多ク煎ル
なのもの何にてもちや大方ハ
ヲ多ハ薬ヲ七分ハ十分ハ丸ニ
を何にても用ヒ有ル

十三　小黒焼ハ丸ス　ひをとをかゝ
酒ニ一夜ヒタシて用ヒケ尾ハ

刀をもつて切ふるゝ
ゝ所をたゝき入て菓子
村立 指ゞ平又上に魚魚子菓子
別名 ひらび 平びらを下にたさうけ
て同ゝ様ゝ指上ゝ魚ゝ盛
ゝけ焼平 元いの魚を去りて
鰭を取ゝげいの姿の皮を去て
身をいとむるなり 亦元病しづめ

あゝのたん塩ゝ成ゝ立ゝ煮た
（諸の病癒り 成形ゝ無ゝいい
ゝて又猛ゝ煮ゝのや 頓ゝ
元病多病 死上熱下 熱ゝ物を病
ゝ事ゝ又ゝ元菓子
十四 立膳三味ゝ事 村立 若多ゝ冊原
ゝシコシ 牛膝 各等分に合せ 弟よゝ
らいゝ用ゝ 細汁小酒ゝ煮ゝ

梅干の汁をもて細末

十五 屬出るゝ小麦粉白米の粉かりて

匙をもて一匁に二度ツヽ夜に入る

十六 麦湯（ハヒリ）とも云 俄なあるこゝろ

ツヽ或は栗をもつて粥をなす

るもあり一つの気をもつ

ふハ苦参甘草利芦根細末等

合せ合せ 牛膝 沢瀉 根せんて一匁

まて一度入る匁 細末

十七 大ゝあに痕れたる女 猪油ふ

是を搔く飯のうへ

り用よくなる 合せる

十八 丈に痕れたる 桔梗 小麦 味噌 或抽合せ

梅干の汁をそゝいのみて付油 妙也

十九 さんくす白ゝりなる茶 胡椒一分 茴香三分

茂木二分 右細末

てよき酒まて

何ぞ塩を加へ一回に二度入れ煎じ
必治ル也

三十 計日を蛙の吸たる葉露の如くに成
りなるを煎じ煮詰て服す

多を忘れ物葉小胡椒桂皮右茅分
よく炒り合計に付き加へ
て煎て流黄硫黄を末して又粉
後ふりかけ服す

九一 霜畏切しなるを煎く葉ふる川芎
桂心山桃仁松ノ緑り皇稜茅分と合セ
胡麻の油にてこそ付て粉霜畏
後ノ也又粉粉粉末にして
三回飲用

九二 疝ふくふくの出たるを入れ葉如ふり
をせんてさかり出たるを
丁度塩煎る湯を合セ押入

[illegible]上に打ちあをして強て[illegible]

十三 馬の気を触[illegible]

一夜陰干し[illegible]馬[illegible]て馬

[illegible]に[illegible]ふ一[illegible]加へて粉[illegible]て

よき酒にて[illegible]度に三匁[illegible]位に一七

日も二七日も[illegible]

十四 くりきりの妙薬 独活柔 拓榴皮

三両 右細末[illegible]合[illegible]

[illegible]て洗ひ右[illegible]薬付ん[illegible]

十五 大正くさに効[illegible]程和[illegible]分同薬を

[illegible]大正[illegible]云ふ前[illegible]たて[illegible]

[illegible]を[illegible]

[illegible]を出す

[illegible]を上へふ付少額ふあゆみ又脊骨

[illegible]薬 苟蓋 二両 鍋砂 二分

松脂 二匁 細末[illegible]

一日に[illegible]度[illegible]

[illegible]三[illegible]

こゝろ引の血を取て去但血取り
後の葉のゝ苟葉一反ゝを荊芽を
煎じて 干姜を方 弱砂二方 右如来めの
きゝまして一間に生後入レ一反に分
三ヶ所角ゝ生居川 但
葉の内ゝハ紙ゝ敷すゝ
心持ゝ又指れまてもあるべ
ゝ肩脇をもゝ角

六六 ゝゝ孔の葉黄陽黄
右指陽に指合を先糟陽まて洗
り乾けのゝ指て左ゝ葉遠
六七 馬俄車に乗ゝ又ハせあ迄たゝ時後か
り出ゝ呂ハ脚の脇れつゝ也
時ハ三ヶ月ゝ五間ゝ生ゝ空中
あり先鶴をゝゝ敷て敷を
ゝ馬合をゝいて指ゝ生ゝ指之

真陸鶴を取りて腹帯にを結帯
にて志うを結てあるとこるの葉
人参麦つ各 梅擣 梅干 苟菓
本香各一両 牽牛子 木面各二分 青竹少
胡椒 蕨粉 水食塩 三匁 一匁八一匁
まぜんすハ一匁八七分のよし
一日一ハ 朋あり
六 梅明り出るとき梅明り出るとハ目
うちにちさ訪すの出るうとを白く
いうもし胡くの鮮るるものびちまり
て出るうるものこ 齋后ハ胡の目
ろうまるまるとを切屋一茶ハ
白丁香 蕗の根 ハ 胡
末稿の羽をそさすす 一元陸鶴の羽
をろをそこちすす 四をちる
ものの刷をやさ一ろる

廿九 牛しつ色たる葉 赤小豆 石庵
石菖分合せ一服 洗葉八月頃のこと
とくに陰干のこと

三十 指よ指られたる葉 天南星 茗蘿
小芋の葉 星槍 右ことの他水にて付処

卅一 ゑび馬面下この葉 章牛子 安二名 仁二名
ちんぢゃく 三分 白物一反 左如未いのこ
づちをもんで天に向て

卅二 矢の根ぬき葉 莉芋生 鳥羽十三里
焼きてりこの他まて 押合分合一
切るぬくらぬ如しこと

卅三 目にうげの立たる葉 ゑの油 鼎
サ下子サ如来目の間 押込て多塩よ
て孫て垂角しぬ如

卅四 熊にくみられたる時用る葉 西海子
の黒焼 夏仲子 薬分合 [redacted]

一ろ醫師ゟ之二種

一ろ醫師ゟ之三種ゟ病薬　人參　芍藥　黄芩
苦參　柏穀　茯苓　梔子
玄参　牛子　大黄　牛膝　各壱分　車前子
右十二味合煎付い飲食後ニ茶入
一ぞいに呑　煎ゟ有りうすし日ゟ
有り又煎ゟ有ゟ　薬あつゟ内
小ゟ　たて煎　二包三包まて

必ひるまの若薄ゝあるゝ苟蒟蒻等
茯苓少々梅柳子 木通 甘草 白朮
木香 莪朮 青つゞら 各二両 せんこん 猪八古
酒食椀一杯入 一煎にせん 何色
手ゝ目家 人参 車前子 牛膝 木通 車
必ひるまの薄ゝ

二
ぐり法の薄ゝ 牽牛子 木通 車
前子 茯苓 梅柳子 莪朮 苟蒟蒻等

業 不香 各二両 耳併 何汁八分食
椀ゝ ゝ酒半分入 一煎にせん
何色 一手ゝ目家一包 二包まで煎
ゝ高麗ゝ

三
虫腹の薄ゝ 木香 香附子 縮砂
莪朮 梅柳子 白朮大 苟蒟 干姜 苦参
耳併 何汁八一盃半入 一盃にせん
梅の枝を一束 よく切りあすゝ通り一把入

[illegible]桃ノ皮共ニて[illegible]汁
[illegible]

四 [illegible]の見病前[illegible]
[illegible]もあり 猪[illegible]
[illegible]も猛[illegible]て猪[illegible]
[illegible]なし[illegible]云又[illegible]
[illegible]
[illegible]

左の薬を飼[illegible]
[illegible]牛子 白朮 芍薬 蕘朮 苟殷 川芎
干姜 陳皮 麦門冬 不凍 木香
槍榔 香附子 各二両 甘草 熟気あ[illegible]
山梔子 茯加 [illegible]
[illegible]
[illegible]

五 [illegible]の薬 川芎 苟殷 茯苓

木香 各二両　大黄 二分　良姜
胡椒 各三分　右八味粗末にして酒にて
味噌一文餅にて焼て右の薬を
酒にて煎じ合て一日に三度
一七日に二七日に飲べし

六 結馬 ずい茎根穀 柏柳 各半分
紫蘇 各一分　巴豆 三分　右の薬
丸にして用ゆ

七 瘡の膏薬　丹参 二分　黄連 一分　右細
末七包にして陳皮大棗五と入合
煎じすりて飲汁に油を合て
七日に一度て飲べし

八 肩の下馬しの薬　土瓜 黒焼 内ノ
ウ 右茶合にて煎じ　指て其外
に右の薬をうるの他まて塗り
の間にて吹入レ其日の内出さず重也

九

馬煩ニ温ものを寒ものを又ハ冷ものを
好むものあるとき　煮飯　川芎地黄
芍藥　強肝陰　各二両　耳鼻少　何汁
ハ水食猥まて　ものを陽ものを多入れ一盃小
ものを二度に飲ませ　手ものを用前分
生姜　炙甘草　少し

十

目某　うつ本のあるとき　山ぞう
引ちゃザ　柴胡　頭痛　詳ニモ成カ　頭痛
て指さす　あるとき目　右目つる目
第ふ　又ものを方の目を縮まて
まき目三度ツ　ひ色を変ず
土

うつ　ふ　婦　ぬ　ものを　芍藥　四逆　土
のをい指さふる　抑合せ　ものを　知ると　九
め汁を指して　右　ものを　指さる
少ものあり　生姜　法子陽　又ものを
ものを　陰

十二

熱菜肥菜　白桃こ葉二両　良姜心分
胡椒三分　白朮二両　干姜二分　西海子霜二両
香附子三分　右合せ細末八麦のうゆの中
入一日に三度ゝ細末一匙ゝ酒を食
椀二つゝの中へ入　細末一匙に付
を立て多く飲　但し四季とも持
あり生を良　美二分　胡椒一分　白朮弐分
干姜一分　合せ粉ゝ

十三

逆瓜毛茸菜　湯英一反　楊梅皮同
英（子同）ちゝや少　ゝ水ゝ合
せ付ゝあり先皂莢（サイカチ）ゝ　其汁を
あゝを洗いおゝ　三日に一度ゝ休也
但し水を高も角
十四

ゝめ菜　茅蒐（ソウズ）を焼すて灰の
油ゝて拭ゝ合先皂莢をせんてある
をゝ　ゝけのゝき柳にして付ゝ

十五 四足平 ゆふの子 苏子 塩くらむしの根
ひめこ等分各四匁ずつ 合七
よく砕きて袋に入れ立布に
茶を付て先せんまして洗米を煎り
て付に成り又せんすの俵よ出来る時
糟湯にて成り先洗成り
十六 かうとう茶 胡桃を粉にしてうこの
陸まてこさこすり此さらさらを指入也

十七 ひ虫の妙薬 大蓼霜一斗 麻とこ苔
同 いの子茶 同 天八仲 三分 白物 二分
菊 藿霜 二両 湯黄 同 右七味合七付也
洗汁に成て其上に付ル成り
十八 ひりつる薬のる 干柿 三ツ 蕎麦粉
少 鍋砂 二分 あるまてすりたて鍋
あを二りこもし成り但二日ま三度ツ
粥に炊りて成一ちこ九ツ鍋成り 又馬ち

たゝいうんをきを（キウ）ゑ色し対ち
ゑ〳〵うに亦帰らるあゝハ千ミ
を菓よして二分せ苦参二分串柿一ツ栗
三分右合七茸酒ゑて一日に三度ツゝひり
ゑもゆて飲べし多く用事を忘
むるし
また有さきのうさ菓前見るゝこの下
ゝ沢（カミラ）の下に出れやこうでのあゝた

必出るものゝうさハ中（ナカ）サゝくるゝて出
事あり菓ハ胡桃三分白物（同）三分ハ
ゝもよゝ能ゝて作り初り毛上に非（ニラ）
の根をとりて〇ゝ死にさらん菓を
すり〇ゝ死にたに触ゝ指合せゝ
の上ゝ付て所よりて上を強ゝて
強て強ゝ亦菓を付ゝるゝに糟
湯ゝゝゝ又ハゝ物ゝて四の出るゝ洗

[illegible]菜を煎じ一盞（カケ）をさくりて
又[illegible]ハ竹かりて
こ[illegible]げ血をたゝしてす[illegible]葉をひ[illegible]
[illegible]

二十 うゝ[illegible]の妙薬 白[illegible]の[illegible]を
塩[illegible]にして虫の食たる穴くこゝ[illegible]き
[illegible]やこゝ[illegible]を忘もの又十
日[illegible]して小便をせんして廿日[illegible]

十一 尾[illegible]の菜 杉の[illegible]菜 陽茎
茎[illegible]去一寸 白物三分 右合[illegible]の油
[illegible]して先車前子
吉木菜 蒴藋（ソウリツ） 蓮の茎 右[illegible]（セン）
[illegible]を汁にして[illegible]
[illegible]して右[illegible]菜を[illegible]也

十二 あ[illegible]の菜 大蓼 烟桃の根
[illegible]

小のこ麻こ麻の葉こうるしを押左
せきんなら所より入ぬ上にくもさし蔕て

六三 馬の舌なるを拔くるに先甲又のもの四
出てきくくくくて面もあり
黄蓮 川芎 桔梗 鄭子 車仲ガ右刺
こ布きれを包こくるものをよゆいつけ
あるあるあるあ

大黄方　上茶両　牛膝同　何汁八盃（スイカヅラ）

をうちくだきて汁椀一つよりて一日三度ずつ飲ゝ一度治ハさ

いとにたるを上をさしてきるを

どの汁をけづりさきをぬぐて土瓶

の底ばかりに一夜置てぬけバ

こゝろくがり黄汁出るなり也又いこゝ

を飲くたちて針を打てひきび

ゑもゝ又ゝいうつゝを上ぼ

こゝけてもゝびゝ置もよしゝん指

ゝて洗てゞ　赤黄稲（キワダ）をせんて洗

ゝゝゝ

六七

やうちの如く 桂心 良姜
木通 車前子 茯苓 各等分 其外
右散薬として 飯汁 木通 をせ
んじて飲ませ

六八

馬筒を打 無筒の内に粉 ほたら
ず 菜ハ もこの 焼 半 煮 加 飯
未 等分 小 食 たる ほどを 能 酒
うめ合せん 成薬を一合 小 成

七九 飯飲ませ

六九

ほたらかみ 菜 をもんで
うで瓜を絞 ゆで 又 を
よく能すて 瓜 ようす
内 加 粉 菜 苦参 を粉 は
てをさくの汁 を 移 合 猪の油 合
せ飲ませ 又瓜 の表 表 も 焼し
又麻 を 焼 て 酒 で 飲ませ

ひやをとくとくに又歯き丹ぢ各一匁
丹少 塩少加 陰まして一分ゆ煮て用ひ
ぬべし

三十 穴かゆなどるるもあり又穴の入るも
るもあり葉ハ丹仲をもん洗て悪
みを焼一匁 白物少黄一匁うるめ
油まして練り合付るなり

三十一 ゆるのもんみさるもあり又友馬

喉さく事五ツ大に効也葉ハ
芋の茎を焼うるの油まして付るなり
出丹仲をもん洗てあるのに
ゆ煎てあるなり葉付る所なり

三十二 鳥居事人参白茯苓一夜白水に
桔梗同 丹仲 皮ヲ 辰砂水飛 香附子各一両
麝香 石膏各一分 右八味細末ゆ
て練り用る

三十三

秘蜜〻指薬 土瓶 黒焼 蝙蝠黒焼 ごうろう

黒焼 式三蘇 業分に合せうこの間を行合計

をなして其後〻の間にて右〻薬を吹合也

四

ぢびの事 薬ハ 菊き川芎 良姜

干姜 人参 白朮 各一両 丹竹少 何付ハ

間て何〻一但 初り薬すして何也

馬医 妙薬集 大尾

右之一冊者家傳之馬医 諸巻

間之 弾 磨 秘 言 授 書 や

東 手 伝 干 熟 習 之 伝 文 書 や

薬師 十二神 一 之 記 顔 書 黒

記 不 残 之 伝 仕 ぬ 事 ふ 可 許

乎 之 者 伝 件

安永九年 二月廿三 表 板

清 之 写 終 右 基 徳 (花)

第四冊元年庚申夏
三月上旬ヨリ写ス元本
者皆虫ノ喰所ヤ

乃澗之